

記録 井上克人先生追悼研究集会 ——井上克人『詩と哲学のあわい』
を手引きとして

水野友晴（井上克人先生追悼行事实行委員会 委員長）

関西大学文学部比較宗教学専修名誉教授で本学会の会長も務めた井上克人先生が急逝されたのは 2023 年 2 月 5 日のことであった。その日、京都大学人文科学研究所の共同研究「語りえぬものを語る行為とその思想表現に関する学際的研究——禅の言葉と翻訳を中心課題として」（京都大学人文科学研究所、2022～2025 年、班長：何燕生教授（郡山女子大学））の共同研究会が同研究所を会場に行われており、先生はそこでの研究発表に対するコメンテーター役を務めていた。会場で倒れた先生はすぐさま京都大学医学部附属病院に搬送されたが、救命はかなわなかった。

井上先生が生前海に掛けて育て上げた関西大学大学院の出身学生（井上ゼミ生）たちは、先生を追悼する研究集会を行いたいという希望を早くから抱いていた。それらをまとめる形で彼ら井上ゼミ生と関西大学の教員とからなる井上克人先生追悼行事实行委員会が発足し、逝去から一年後の命日に遠くない時期に研究集会を開催することとして具体的な企画に入った。

追悼研究集会の柱としたのは、かれら井上ゼミ生たちによる研究発表である。生前の井上先生は研究会の開催とそれを通じての若手の育成に熱心で、2020 年 3 月末に特別契約教授の期間を終えて関西大学を退いたあとも、学内・学外を会場に定期的に研究会を開催していた。残念ながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大と、研究会の対面形式での開催にこだわったため、研究会は一時中断を余儀なくされた。その後、新型コロナウイルス感染症が感染症法の定める 2 類感染症から 5 類感染症へとその扱いが変わって外出自粛が求められなくなったことにより、先生が招集する研究会も少しずつ再開されていった。しかし本格的な再開を待たずに先生は逝去となった。

また、井上先生はゼミ生たちの将来を大変に心配し、彼らに少しでも有意義な将来が訪れるようにと指導と業績付与に熱心であった。学会で研究発表するようにとゼミ生たちに声をかけ、研究発表を行うと聞けばそれが充実した内容となるように事前に自分の研究会で発表させるのが常であった。したがって、追悼の催しをするのであれば、それを通じてゼミ生たちが研究業績を積む場にして欲しいと先生なら

ばお考えになるのではないかと思われた。こうした経緯から、かつての大学院井上ゼミ生たちによる研究発表を追悼研究集会の中核に据えるよう企画した。

追悼研究集会は 2024 年 3 月 2 日に関西大学の大学院棟である尚文館 501 教室を会場として、井上克人先生追悼行事实行委員会が主催となり、関西大学哲学会、比較思想学会近畿支部会、南山宗教文化研究所には共催、西田哲学会、宗教哲学会には後援していただいて開催された。当日は快晴。会場は座席が足らなくなるほどの盛況ぶりであった。以下、追悼研究集会のプログラムを掲示することで、そこで行われた研究発表の題目と発表者名を紹介する。基調講演については発表原稿の全文を掲載する。

井上克人先生追悼研究集会——井上克人『詩と哲学のあわい』を手引きとして

日時：2024 年 3 月 2 日（土）

場所：関西大学 尚文館 501 教室

主催：井上克人先生追悼行事实行委員会／共催：関西大学哲学会・比較思想学会近畿支部会・南山宗教文化研究所／後援：西田哲学会・宗教哲学会

プログラム

司会：酒井真道（関西大学教授）

13：00 開会挨拶：中谷伸生（関西大学名誉教授）

13：10 基調講演：水野友晴（関西大学教授）

「超越と言葉 —— 井上克人先生の論に学ぶ」

13：40 研究発表

山中崇史

「西田哲学における華嚴思想の一解釈

—— 「事事無礙」と「事実の自己限定」を中心にして ——」

喜多源典

「西田哲学における「平常底」と「他者への存在」

—— 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」と井上克人

『詩と哲学のあわい』を手がかりに ——」

末村正代

「〈即非の論理〉の淵源と構造

—— 井上克人〈露現と覆蔵〉的解釈の可能性」

位田佳永

『大乘起信論』と親鸞の「自然」

15：20 コメント：宮本要太郎（関西大学教授）

小田淑子（元関西大学教授）

16：00 コメントへの応答

16：20 フロアとの質疑応答

17：30 懇親会 関西大学 第1学舎 不二家食堂

基調講演

超越と言葉 ― 井上克人先生の論に学ぶ

水野友晴

はじめに

追悼、井上克人先生。私が井上先生にはじめてお目にかかりましたのは、当時大学院生として在籍していた、京都大学大学院文学研究科日本哲学史専修の原書講読の授業でした。この専修が発足してから日本哲学史の原書講読は北野裕通^{ひろゆき}先生、次いで岡田勝明先生が担当され、井上先生は三代目の講師としてご出講でした。どの先生もテキストとして使用されたのは西田幾多郎の『善の研究』で、西田哲学を研究対象としていた私にとっては、この京大日本哲学史の原書講読の授業はさまざまな先生の『善の研究』論がお伺いできる絶好の機会となり、大変興味深いものでした。しかしながら井上先生に続いて原書講読の講師となったのはこの私で、この授業はその後 10 年以上も担当させていただくことになりましたので、私が他の先生から『善の研究』の原書講読を聴講するという機会はその後なくなってしまいました。

余談となりますが、この京大日本哲学史での井上先生による『善の研究』講読で印象に残っていることの一つに、井上先生が純粹経験の具体例を車の運転に例えてお話しになった、ということがあります。純粹経験の具体例としては、『善の研究』の中で西田自身が「たとえば一生懸命に断岸を攀ずる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時の如き」（正確に言えばこれは「主客未分」の「知覚の連続」の例と言うべきですが）を挙げていますが、それに続けて井上先生がご自身の言葉で、「車を運転する際に、ハンドルをこう回して、次にアクセルをこう踏んで、といちいち意識しているようでは車はスムーズに動かない。そういうことを意識しないようになれてはじめて車は運転できる」といったことをおっしゃいました。また、『善の研究』第二編第四章は「真実在は常に同一の形式を有っている」と題された章ですが、この章タイトルについて井上先生は、「そうです。これが実に大切なことなのです」とみずから頷かれ、このタイトルに学生の興味が向かうようにお話しでした。

もっとも井上先生にとっては、西田によるこの章タイトルは「真実在は常に同一の構造を有っている」となったほうがより適切と評価されるのかもしれませんが。

本題に戻りまして、『善の研究』講読全体を通じては、井上先生は唯一実在についての西田の考えに注目し、それが本体的一元論的性格を有するものであること、それは現象即実在論と呼ばれ、明治中期において流行を見た思想傾向の流れを汲むものであること、さらにこの思想傾向は西田ら明治の青年が幼少の頃から無意識的に取り込み、思想基盤としてきた東洋世界のものの見方が基礎となっていることについてお話してくださいました。『善の研究』の根本概念である純粹経験は、用語としては、アメリカのプラグマティズムに属する哲学者であり、心理学者であったウィリアム・ジェイムズから主として持ち来たらされたものであることは周知のことですが、これを鋳型に流し込まれる銑鉄に例えたならば、井上先生はむしろその銑鉄が流し込まれる鋳型の方に注目し、その鋳型の形状、性質、素材、年式などについて私たちに詳しく語ってくださったと言うことができるのではないかと思います。そして井上宗教哲学の中心に坐っていたのも、ここでいう鋳型の形状や性質に関する関心であったと、私としては感じています。それは何についての関心であるかと言で申せば、超越についての関心であったと言えるのではないのでしょうか。

一 東アジア思想を育んだ内在的超越の思想基盤

いま申しあげましたように、井上宗教哲学における関心の中心に坐っていたのは、超越ということであったと私は感じています。しかも、特に注目が注がれた超越のあり方は、内在的超越と呼ばれるものであったのではないのでしょうか。内在的超越という超越のあり方は、超越的次元を現世的次元から峻別するのでなく、現世的次元における展開のひとつひとつが、展開ということではそれぞれに個別性、多様性を現出するものであると同時に、そうした展開・現出において何らかの共通性や一貫性、すなわち変化しないものがあわせて見出されてくるといふものの見方を特徴とします。様相としては彩り豊かで更新されてゆくものである現実世界の動的展開は、見方を変えれば破られることのない統一の中に常にあり、現実世界の動的展開はこの統一の外に出るものではなく、むしろ統一が現に存在し、統一が統一として実現していることの具体的現れとしての動的展開としてある、というのです。したがって内在的超越の考えにあつては、現世的次元と超越的次元は峻別された二

者というわけではなく、ある一つのものを表から見た場合と裏から見た場合といった表裏的關係にあるものとして捉えられていると言えると思います。

井上先生の研究業績は、この内在的超越の超越観が東アジア世界の思想的基盤として古代から現代に至るまでの諸思想を形成せしめてきた源泉であることを解き明かし、さらには東アジア世界のみならず、古代ギリシア哲学やそれを参照する西洋近代哲学においても重要な思想基盤の一つとしてあったこと、したがって内在的超越に注目すれば、これら古代ギリシア哲学や西洋近代哲学と東アジア哲学との間に思想比較の地平を開き得ることを示したことにあったと思います。

さて、井上先生は、内在的超越の超越観が古代から現代に至る東アジア思想の思想的基盤としての役割を果たしてきたことの実例を、古代にあっては僧肇の『肇論』（天地我と同根、万物我と一体）や『大乘起信論』（水と波の比喻で説かれる体用の関係）にそれが見られることで示されました。たとえば水と波の比喻に見られる内在的超越の関係性について、井上先生はご著書『詩と哲学のあわい——宗教哲学・比較思想論攷』（関西大学出版部、2023 年）で次のように語っておられます。

「水が大波小波いかようの波の姿をとろうとも、水の本体（湿）は常にすべての波の形状を超えて、水そのものの自己同一を保持している。このように体はあらゆる用を一貫する「統一的或者」として自己同一性を堅持しており、体は本体としてはどこまでも超越を保っているのである。そうした意味で体用の論理は「内在的超越」の論理である」（井上克人『詩と哲学のあわい——宗教哲学・比較思想論攷』関西大学出版部、2023 年、130 頁）。

このように『大乘起信論』における水と波の比喻は、波がいかようの姿をとろうとも、そうした変化は波の本体たる水が水ではない何かそれ以外のものへと変容することではないこと（あるいは湿、すなわち濡らすという働きが何か別の働きへと変容してしまうことではないこと）を示していること、むしろ本体たる水の性質が、波が大波小波といったより多くのヴァリエーションを示してくることでより詳細に開示されるようになることを語っています。この比喻に基づき、現実世界のあらゆる事象をもって、それは本体たる真如をより詳細に開示する、いわば波の豊富なるヴァリエーションの如きものとして捉えれば、私たちが見聞するあらゆる事象にはそのいずれにも何らかの形で真如が示されているということになります。

そして中国における華嚴、また禪宗はこうした探求、すなわち諸事象との出会いを通じてそこに何らかの仕方で示されている真如を看取するという仕方での知の探求から生まれてきたものであったと同書で井上先生は語ります。禪宗といえば坐禅瞑想を基本とし、特にその初期の姿としては都会を離れて山谷に自給自足し、あわせて近隣に托鉢する修行僧の姿が思い浮かべられますが、井上先生はそうした実践が禪宗の本質なのではなく、真如の把握という根本知こそがその本質であると説かれました。つまり井上先生は禪宗を、知を排除する知不要の宗門としてではなく、通常の知の次元をさらに超えた根本知（超越に関する知）を重視する極めて高度かつ形而上学的な知的宗門として位置づけたことになります。

この、通常の知の次元を超えた高度で形而上学的な知が有する性格こそ、“露現と覆蔵”という用語から井上先生が生涯取り組まれたものであったと思われます。諸事象と真如とが表裏の関係にあり、さまざまに変転する事象のいずれとも不変なる真如が結び合っているならば、真如の姿は変転する諸事象のどの1つにも固定化されてはなりません。水と波の比喻において、本体たる水が、濡らす（湿）という働きを絶えず働き出すことによって大波小波といった諸様相が現出し続けると説明されたように、真如の絶えざる働きによって諸事象が絶えず現出しますが、諸事象の姿形は真如の働きそのものの姿と同じではありません。木の枝が揺れ動くことで私たちは風がそこに吹いていることを看取しますが、風そのものはこれを目で見ることができないように、諸事象が絶えず現出し変化し続けることは真如が働いていることの証左ではありますが、真如の働きそれ自体はこれを直接に見ることはできません。“露現と覆蔵”とはまさにこのようなあり方を指しての言葉であると言えます。

二 西田哲学も内在的超越の思想基盤の上にある

“露現と覆蔵”という捉え方にあっては、直接には真如の働きを見ることができないということが真如があることへの懷疑を生むのではなく、見えなくともその存在は何らかの仕方であかされるという具合に、通常の知る仕方とは異なった仕方から超越的次元に向けて知の通路を通そうとする営みを生むことになります。すなわちそれは通常の知の脈絡を超えるような、第二の知の脈絡を開くことになります。知のこの第二の脈絡は、通常の知の脈絡と無関係に開かれるわけではなく、むしろ通常の脈絡を前提として開かれるものですので、私たちが日常で使っているところの語彙や語法がそこにおいて全面的に通用しなくなるわけではありません。ただし

この第二の脈絡にあっては、眼前の風景の表面ではなくむしろその裏面たる超越の側面が表わされる必要があり、したがって眼前の風景を形容する言表に対しては、それを否定するような言表が添えられたり、常識的な理解が阻まれるような論法が使用されて、背景的超越への視点移動が促されることになります。

たとえば発展という言葉表にあっては、発展即遡源という具合に遡源という言葉表が添えられた事例を見ることができます。遡源は発展に対して逆方向のベクトルを有する言い方と見ることができますから、発展即遡源という言い方は相反するベクトルを共存させることによって発展ということを打ち消す、すなわち発展の否定ということがそこにおいて企図されていると見られます。

そこで、発展に付して発展即遡源ということが言われる場合、発展と発展即遡源とは同次元のこととして言われているわけではないと見ることになると思われます。発展はあくまでも発展でなければならず、新展開や新登場といったことがそこにおいては起こっています。ただしこれは第一の脈絡におけることだと言えるでしょう。

これに対して、その新展開や新登場は真如や真理といったことの上で起こっているのであり、真如や真理をこれまでにない仕方でわれわれに表し得たからこそ新展開や新登場として位置づけられるのだと言うこともできるでしょう。つまり、新展開や新登場における新ということは真如や真理を破り出たからそう言われるのではなく、むしろ真如や真理の枠内にあることでもってそう言われるのであり、真如や真理から見れば発展によって特に何かが増えたり新しくなったりしていることはありません。このような脈絡は第二の脈絡としてこれを見ることができます。

現世的次元における発展と、超越的次元における非発展。発展に付して発展即遡源ということが言われる場合、そこにあるのは現世的次元と超越的次元のその両方に目配りがなされていると言えるでしょう。発展即遡源（＝発展即非発展）という言葉表は語彙語法の日常的用法に依拠しつつあわせてこれを破るという用法でもって現世的次元の背後に存する超越的次元の消息を伝えんがための第二の脈絡の用例としてこれを見るべきであろうと思います。

西田哲学への井上先生の注目も、この第二の脈絡への関心、あるいは第一の脈絡に第二の脈絡を添える構造への関心に導かれてのものではなかったでしょうか。西田最晩年の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」に登場する「億劫相別而須臾不離盡日相對而刹那不對 此理人々有之」の大燈国師宗峰妙超の言葉、すなわち遠く離れていても一瞬たりとも離れたことはなく、毎日対面していても一度も会ったことはない、というその不思議なものは、これまで見てきた超越的真如のことであると

捉えれば、容易に合点することができますし、著書『働くものから見るものへ』の「序」で西田が語った、東洋文化の根柢に「形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云つた様なものが潜んで居る」という有名な発言も、形や声といった可感的なものが、実は非可感的な形なきもの、声なきものをその背後に控えていると見られることで、現世的次元と超越的次元とを表裏の関係と見る見方が西田にあったと見ることができます。

そして『善の研究』に関する井上先生のご研究も、内在的超越に該当する文脈を『善の研究』から発掘するという性格のものであったと感じます。『詩と宗教のあわい——宗教哲学・比較思想論攷』に収録された論文「西田哲学における禅思想の特質」で井上先生は、『善の研究』の根本概念である純粹経験について、「それは自発自展しつつも、どこまでも〈統一的或者〉として超越的一に留まっている」（同書、139-140 頁）として、現世的次元における発展と超越的次元における非発展とが表裏的關係を結ぶ構造からこれを理解しておられます。そして次のように語られます。

「最も直接的な純粹経験とは、その直接性のゆえに、本体的な在り方を特質として持っているのであって、「無念の体上に本知あり」という神会ひその輦ひそみに倣って言えば、純粹経験とはまさに「無念の体」そのものにほかならず、しかもそれは「本知」即ち〈自覚〉の構造をおのずから持っていることになる。とは言え、その自覚は、純粹経験がやがてその直接性から脱自的に反省や思惟へと自己展開してゆくその方向とは逆の方向、つまりその脱自的に自己展開してゆく真只中で、その都度、その展開を統一あるものたらしめるべく、自己遡及的に翻ってゆく自己還帰的な働きを意味しよう」（同書、140 頁）

このように井上先生は、『善の研究』の根本概念である純粹経験について、これを『大乘起信論』や禅宗を形成せしめた内在的超越の論理の系統に属するものとして読み解かれました。つまり西田哲学を井上先生は、古代東アジア来の内在的超越の論理が近代においても息づき、そこから行われた同時代の世界的課題への果敢なる挑戦の一つの成果として位置づけられました。このように見ることで内在的超越の論理はいまだ現役のものであり、決して失われた伝統ではないことを示されたわけです。

三 日本文化における内在的超越の美意識

最後に、内在的超越の論理が古代から近代にかけて東アジア世界におけるものの見方の形成に尽くしてきたものであるのであれば、それは日本文化の特徴とどのような関わりを有すると井上先生が語っておられるかについて見ておきたいと思います。

『詩と哲学のあわい——宗教哲学・比較思想論攷』の第一章「日本文化の根柢にあるもの」（これは井上先生が本学を退職されるにあたって本学で開催された退職記念講演会でお話になった内容が活字化されたものです）で井上先生は、日本人は（ということは日本人の文化は、と読み替えてよいことでしょうか）大きな〈いのちのリズム〉とつながっている（同書、24 頁）という指摘を次のように行っておられます。

「我々日本人は、川とか海とか山々など、広大無辺な生命の世界に生き、生かされ、ともに息をかわしあって生きている。息づかいをかわすというのはどういうことか。「息づきあう」とはどういうことか。それは祈りのかたちとして、例えば踊り、祭り、お百度参り、聖地巡礼、お遍路など、様々なかたちとなって表現される。そうした営為は、いわば大きな〈いのちのリズム〉と繋がっている。詩歌もまた、ともに息づきあっている生命のリズム、あるいは調べ、響き合いにほかならない」（同書、同頁）

このように井上先生は、日本人が大きな〈いのちのリズム〉とつながっており、これと息づきあうことが日本文化に踊り、祭り、巡礼、詩歌といったものをもたらしていると語ります。この〈いのちのリズム〉とそれとの共振という考えを井上先生は、哲学者磯部忠正からとられています。井上先生が引く磯部の発言を同書から引用しましょう。

「いつのまにか日本人は、人間をも含めて動いている自然のいのちのリズムとでも言うべき流れに身をまかせる、一種の「こつ」を心得るようになった。己れの力や意志をも包んで、すべて興るのも亡びるのも、生きるのも死ぬのも、この大きなリズムの一節であるという、無常観を基礎とした諦念である」（磯部忠正『「無常」の構造——^{かみ}幽の世界』講談社現代新書、1976 年、4 頁。井上克人『詩と哲学のあわい——宗教哲学・比較思想論攷』では同書 23 頁に引用。)

この磯部の発言、特に「生きるのも死ぬのも、この大きなリズムの一節」といった主張をふまれば、日本人における彼と〈いのちのリズム〉とのつながりは同格的な二者間の関係としてではなく、各人の生死が〈いのちのリズム〉上の一波瀾として捉えられるような本体とその現象との関係としてみられるべきでしょう。このように井上先生は、〈いのちのリズム〉につながるという日本文化の特質の中にも内在的超越の関係性があることを見て取ろうとされたのだと思います。

そしてこの関係性にあつては、私たちが生をうけ、誕生から死へと一方向の人生を過ごすことになるのが本体たる〈いのちのリズム〉の脈動の故であり、そのことの自覚が“無常観を基礎とした諦念”として締めくくられるのは、その人の一度きりの人生が無意味かつほかと代わり映えしないものとして意識されることによるのではなく、その人が固有の人生を生きるそのことこそが、その人が〈いのちのリズム〉の一節としていまリズムを刻んでいるということであり、そしてそのことでもってみなと同様に〈いのちのリズム〉の一波瀾としてあるという関係性からそれが理解されるからだと思われます。

こうした、無常観を基礎とした諦念が日本において文学となり文化となったのは、そこに一種の美が見出されたからだと思われますが、たとえば井上先生は「花は桜」という日本人の趣味はこのような美意識を端的に反映したものとして捉えておられます。

うつせみの世にも似たるか花ざくら咲くと見しまにかつ散りにけり（詠み人知らず
『古今和歌集』）

〔はかない人の世にも似ているなあ、桜の花は咲くのを見たと思ったら、同時にもう散ってしまったよ〕（同書、17 頁）

桜の花が咲いてから散るまでの時間は僅かなものです。人の一生もまたあつという間に過ぎ去ります。しかしその生から滅までの一瞬が不生不滅たる本体的超越との内在的超越の関係にあるとされる時、花が咲いて散るという一瞬間はかえって厳粛な永遠性を垣間見せることになります。それは咲いて散るというはかなさの中にあるものではなく、はかなさがかえって反照的に示し出すものです。日本文学や日本文化がもつこうした美意識は、禅宗についての研究において井上先生が注目された、通常の知の脈絡の否定を通じて背後的超越の消息を伝えんとする第二の知の脈絡と同一系統にあるものであり、それが美的方面に展開したものと申してよいのではないのでしょうか。

おわりに

この拙い講演を閉じるにあたって、詩を一つ引用させていただきます。かつて私が難病に倒れ病後の療養を絶望感と鬱々とした気分から過ごしていた折、井上先生は内山興正老子の『大空が語りかける——興正法句詩抄』（柏樹社、1985 年）という詩集を送って下さいました。この詩集にある「大空」と題された詩です。

大空

あおい大空こそは
わがふるさと

幼いころの目に映った
広さがそのまま
そこにある

幼い日の憧れにも似た
明るみがそのまま
そこにある

幼い日のながい午後
ふと仰ぎみた
爪のような新月の匂いが
そこにある

そしてみつめてもみつめても
つかみきれぬ深さの
安心しきれる存在が
そこにある

井上先生、ありがとうございました。